

蝶花坂名歌鳴臺

二〇

八首 小坂部館の段

〔解題〕寛政六年七月十五日から道頓堀大西芝居(座本豊竹榮次郎)で興行。作者若竹笛躬・中村魚眼。

敵味方と別れた武家の棟梁真柴久吉と周防の國主大内義廣との仲を和解すべき勅命を受けた兩家の重臣加藤正清と出海左衛門宗貞とは義兄弟であつたが、共にその妻の父に當る日本無雙の軍略家たる安藝の小坂部兵部音近を味方として事件を有利に解決しようとの心底を有ちながらも、體面上共に義として妻を離別して掣舅の縁を切つた事とした上に、各其の子を使使として音近を父への味方にと一命をかけて勧誘させる。音近は義理ある孫の姫市(清正の子)には名刀、實の孫の松太郎(宗貞の子)には刃引の鈍刀を與へて眞剣勝負をさせ、その間に自刃して身の立場を明かにするといふ八冊目を以て全篇の山として五段十一冊から成つてゐる。本曲では大内義廣は島津義弘、小坂部音近は長曾我部元親をモデルとして、太閤記を種として夢幻的に想を構へ、眞柴大内兩家和睦して、源氏系統の大内義弘が、平家末流の小田家の姫君春姫と婚禮をするので、外題の角書に「聾君は源家の類葉、嫁君は平家の落人」と置き、又作中に「男女別あり夫婦有る、かためは雌雄の蝶花形、相生祝ふ島臺や」とか「御祝言、蝶花形は春姫の奥入國入り……」といふ句などのあるに因んで「蝶花形」「島臺」の外題文字を据ゑ、その上に柴田勝家の女大隅が父の辭世である「夏の夜の夢路はかなきあととの名を雲るにあげよ山郭公」の短冊を所持して岩國山で母の小谷の方に再會する(十冊目)條から「名歌」の文字を取り入れて外題名を作つたものと思はれる。

地秋は殊更もの淋し。千草にすだく蟲海。加藤が妻と言はるゝ身を以て。は心。娘ども。篤と工夫を仕れ。アイ。ならで。木ノシ臺子の釜の音澄みし。地したなき振舞。さりながら。主家を思。地とは言へど姉妹が。長地夫の心しら數奇屋待合前裁の。路地と勝手を忍びふの貞節。さのみは叱らぬ。仲直りは幸布とかけし扇の判じ物。解けぬ色目を足。隔て合うたる姉妹が。心も先へひく。姉妹仲も濃茶の盃。サ爰へ。地見て取る音近。圓真柴が招きに従はざ。フシ飛石傳ひ。地それと眞弓が姉様か。くと機嫌よき。父の詞に葉末は差寄。見る。舅も甥も心々。けふ細布胸合はず。調オ、妹。爰へは何しに。エ、聞えた。り。詞今四海一統に。久吉方へ從ふ時と。一家の縁も此の如く。斷ち切る布わしを出し抜き父上を。大内方へ味方節。理を非に曲げてお味方を。イエくは離縁の印。エ、そんなら私は正清殿に付けうと思やるのか。さう言はしや姉様まんがちな。申し父上。義廣様へおに。オ、そちばかりでない妹も。故郷んすお前こそ。先へ廻つて久吉方へ。味方せうとつい言うて下さんせ。ハテを慕ふ詩を。扇面に書し送りし左衛勧める心でござんせう。エ、つべこべ姦しい。是非返答が聞き度くば。雙方門。要害をはづせし其の扇。親骨子骨ばと口答へ。地そこ退きやらぬかと突退とも罷りならぬ。此上はそち達が持参らくに。因を切つたる扇の去状。地けて行くも姉我意隔つる眞弓。邪魔しの品を改めよと。地取出し渡す以前のハアはつとばかりに詞なく。目には涙やんなど振りほどく。風に屏風の柳腰。箱。心濟まねどめいゝが。あたふたの。玉手箱。フシ明けて。悔しき思ひな帶際とつて引戻す。腕も。かよわき。口明けて取出す。様子は何かしら布に。り。地時もしも次より近習の武士。圓眞蓮亂す黒髪兩方が。掴み合うたる姉妹。詞ムウケふの細布胸合はずと古歌の下。柴家より使者として加藤正清。大内よ喧嘩。争ふはずみ縁側へ。轉る拍子に。の句。手跡は夫正清殿。わたしが方はり使者として出海左衛門宗貞。只今はつたりと。フシ思はず聞く障子の内。コレ此の扇。ドレく。秋來月を見てへと知らすれば。しをれし葉末も露地閣を楽しむ昔近が。臺子にかゝり獨り思多し。自ら籠を開いて白鷗を放つ。持つ心地。調オ、よい所へ夫の使者。服の濃茶の。フシ手前他念なく。調出ム、コリヤコレ。故郷をおもふ詩の子仲なした夫婦合ひ。合點もさせず去

られた様子を。オ、さうでござんすとちや。オ、笛市殿の言はしやる通り。^並して見やしやんせと聞けがしの。詞義も。私とも同じ事。お使者であらうコレ餘所の小母様。^{おじいさま}祖父様へのお取次。も耳に當り隙り。聞コレ妹。親の口からが此の恨み。頼むは姉様呑込んだと。お頼み申し上げます。^並と言合せねど子を賞めるは聞き難い。それ程の事しひ。詞ヤア縁切れたれば。他人向。無兵部。老の氣丈の長榜。左右に小太刀死ぬる覺悟に極めて居ます。オ、さう禮の挨拶仕るな。地身も禮服に改めん携へて作法。フシ亂さず歩み出で。詞である。早う用意^並と上下の紐と。言ひつゝ立つて奥深く。入る間に久しく對面せざる内。ハテ大人しく生を解くやらほどくやら。上著脱がせば程もなが廊下。加藤虎之助正清と。親立ちしな。娘が縁に引かれざる。小坂同じくも。フシ下は無紋の死出立。^並地の名をかる笛市が。まだ十才の腕白盛部が性根を知り。縁を切つて孫どもを。見るよりはつとは思ひながら。詞オ、り。年も相生ふ松太郎。父左衛門とは使者に差越す發明々々。が若し。此の出かしやつたなう。眞實極めたそなたも亦。オクリ名は芳しき梅檀の^{さん}實生。祖父が承引せすば。其の儘では歸られの覺悟。誰も口では立派に言へど。まゆゝしく打通れば。^並思ひがけなき母まい。篤と思案を定めよ。^並出易いものとと母。詞ヤア左衛門殿と思うたは松太たす松太郎。詞この役目仕畢せねば。初めの嵐。吹き戻されてコレ姉様。詞郎か。ようおちやつたの。笛市も父様生きて屋敷へ戻るなと。父様のお詞。臆病風とは誰がこと。儀によつては命の御名代ちやの。長上下の著こなしぶり。よう似合つた事わいの。サア^ノ。母は見るより。詞オ、さりヤこちの子も同じ事。父上のお返事お使者の口上此の母へ。イエ^ノ。父う無うてはならぬ苦。大人も及ばぬ健次第。立派な覺悟見物しや。イヤ松太様と縁が切れた。お前は餘所の小母様氣さを。眞似がなるならどなたでも。郎が覺悟を見せう。見事そなたが。お

前がと。我が子最員に取りのぼしフシへ祖父が味方。心覺えのこの二腰。是ナホス地劍の光打合ふ刃音。見る目ひや詞しどろに争へば。調ア無益の論談を以て立合へ。地と渡せば取つてめい左程離縁が悲しくば。切つたる縁を織いぢ合はす。工夫は様々。さりながら。わの目釘喰ひしめし。ハヌミ股立りしくれ速は此座に叶はぬ。早く立て。うじ身拵へ戸の隙間より差覗く。母と。母と老のいら立ち是非もなく用ひぬか。とはあられぬ思ひ。年端もいかぬ二人と立兼ねるは。父が詞を用ひぬか。母のしをり門。親子の中も。フシ隔つるは餘りな。慘いわいのと搔口説く。切戸。地掛金かけて申し祖父様。詞久吉親の。思ひぞやる瀬なき。地耳にもかなみだ。まさも潔よき山の井の水。方へお味方あらば。わしや侍が立ちまけず昔近は。床に直せし鼓取上げ。謂わ山の井の。ナホス地手旗も届せぬ松太郎せぬ。オ、武士が立たうが立つまゝれ壯年の頃。武將足利義晴公。數度の軍尖き刃先篠市が。高股四寸斬付くれが。祖父様はこつちの味方。イヤさう功御賞美あり。猶も武名を鳴らせよと。ば。調アレ篠市が斬られたわいの。ソはなるまい。して見せう。オ、出かす御と名付けし此鼓を下し賜り。年賀毎レ～～油斷しやんなア、危な。天晴れ勇者の悴ども。しかし大に打つが吉例。今六十の賀を祝す。謂い。必ず負けてたもんなど。あせり内に付けば篠市が恥辱とならん。とあひ終らぬ其内に用意よくばと打鳴す。ながらも親々が詞の助太刀五角の手つて真柴に従は。松太郎が身の上。鼓の調べ。白刃の双抜放して立向ふ。練。斬つつ。斬られつ。進る。血沙染めいづれを捨ていづれを取らん。かの獅互のかけ聲。鼓の矢聲。甚有難や治まなす秋草も色を。争ふ修羅の庭。勝負子の子を試すに等しく。此場に於て兩る御代の習ひとて。山河草木穂やかに。いづれと氣を配る。父と。父とは千萬無人が。眞剣の勝負を試み。勝つたる方五日の風や十日の雨が下照る日の光。量。母は外面に血の涙。祖父は早むる

轄のせめ。姉君は船。く。臣は水。太郎。員工、わしや負けたか口惜しい。ば。ナウ何故の御最期と。右と左に姉水よく船を。浮べく。臣よく君を。地今一勝負と刀を杖。立上れどもよろ妹々取付ければ氣丈の手負ひ。眞仰ぐ御代とて返すべくも。よき御代なく。見る目に母は堪へ兼ねて。弓が顔を打眺めて。涙を浮め。眞れやく。萬歳の道に歸りなんく。オ、道理ちやく。道理ちやわいなう。オ、恨みは尤もさりながら。何をか包ナホヽ地深手に弱る松太郎氣萬の姫市まゝ。武士の。意地とはいひながら。孫はまん。松太郎へ最前渡せし一腰はな。刃くり立て。止め刺さんと立寄る。詞子よりも可愛いと世の謡もあるもの。弓も同じなまくら物。さるに依つて姫ヤレ待て。勝負見届けたぞ。娘どもは手を。見殺しにする片意地は。むごい無市が手疵は薄手。斯く計らひし一通り。負ひの介抱。早く。地早くに母と母我身情い父上と。恨みの數矢かぞへ立て。本意ならぬと言ひ聞かさん。姉の葉末をしづに東西の。掛金はづれ押明くる。いふも眞弓が子に迷ふ。悔みにいと。は先立ちし。我兄元胤が忘れたま。としや遅しと駆入つて。我子々々に縋りしき。詞才、嬉しや姫市そなたは漢。姉ヤア武士様に恨みはない。がら。義理ある孫の姫市が命を助け。病。神や佛のお蔭ぞと姉姉は喜ぶ妹は。地負けたはわしが未熟から。大事の役肉身の松太郎を殺せしは。指す敵加藤手負ひにひしと抱き付きスエテ介抱おろ目を仕損じた。憎い奴ぢやと父様に。正清に。縁を引いたる親左衛門。返り忠か。泣叫ぶ。詞ヤア武士の家に育ちな叱られうかとそれが悲しい。もし尋ねもあらんかと。地主家義廣の疑念を晴がら未練至極。姫市勝負に切り勝つ上でなら姫市に負けはせぬ。調怪我につらすは。骨肉の一子を殺す。義者の潔白。は。兵部晉近今日より。久吉公へ味方い斬られたと。地いうて詫びして下さ此上なしと思ひ寄りしも。義理といふぞと。地聞くにいそく姉葉末お馬のれと。今はの際も名を惜しむ稚心のい二字が劍となつたるかや。月にも。花先の高名にも。勝つた手柄と賞めそやちらしさ。堪へし祖父兵部。以前にも代へぬ程いづれ。劣らぬ不便さも。す餘所の悦び子心に。聞くも無念さ松の刀抜くより早く腹へかばと突立つれ産みの娘が産みの縁。分けて可愛い松

太郎コリヤ無駄だとばし思ふなよ。年は舌も絶るゝ断末魔。詞オ、苦しから喰ひしはる。心を察し正清も保ちかねこそ寄つたれ無變の勇者。小坂部兵部せつなから。地その苦痛より此祖父が。たる共涙親は泣寄り眞實の涙々に。暮昔近をそちが刀でこの如く。小腕に仕斬つのはつつの度々を。地謡鼓で紛らし近き。フシ秋や。哀れを添へぬらん。止め潔よく。討死せし手柄者。出かしても。肉骨を裂く苦しみは。一百三十地左衛門悲歎の涙を拂ひ。詞一子を殺をつたと父地親が褒めこそそれ叱りはせ六地獄の呵責を一度に請くるとも。よし。二心なき我が誠忠を顯はすも。悴まい。心残さず臨終をと。義理の孫子も此の上のあるべきか可愛の孫やと取と恩愛に捨つる命の有難さ。姉はもと亂し。歎けば姉はせき上げ〜。孫子び結ぶ誓男。詞ホ、ヽヽ、正清とてもより妹が。さうとは知らず父上を恨んの爲にお命を捨てゝ恵みの父の恩。船左の如し。大内義廣征伐に小坂部が討だが勿體ない。コレ松太郎聞きやつた車にも積まれうか。そればかりかはい死と。地記録に残さば松太郎。男の追福か。そなたが死ぬるは父御のため。負とし子を。義理の刃に殺すのが悲し此上なしと。聞くよりにつこと打笑みけたのちやない勝ちやといなう。ア、う無うて何とせう。こらへてたもと妹に手を合はしたる詫び涙。詞アノ姉様み相果つる。兵部が末期の置士産。筆す。地元の通りに父様と。中よう添うの勿體ない。斯うなり行くも先の世の市に與へし太刀こそ。我が重代。北辰下されや。母様。母様はどこにち約束事と諦めても。地こんなゆゝしいの二字を刻し。武運守護ある七星丸。萬や。オ、爰に居る〜。悲しやそなた子を殺す其日も變へず父上まで。同じ夫不當の正清に。劍の威徳加はりて。は。もう目が見えぬかいなう。トイ。侍刃の憂別れ。神も佛もなき世かと手を地和漢に美名を残されよ。此上頼むはの子が未練など。笑はれうか知らねど取交し姉妹が返らぬ悔み宗貞も。加藤末子和三郎。小坂部九郎昔近と。我がも。死ぬる今は父様や。お前の顔がが手前恥ちらひて爰にとだにも得も言若年の名を繼がせ厚恩ある久吉公。御たつた一目それが。地それがといふ跡はぬ。胸の苦しさ目に餘る。涙見せじと子孫の時に至り。スハ御大事と見るな

らば。粉骨盡し忠義を立てなば。草薙必勝の破竹の勢ひ。急ぎ御出馬然るべ 摘みにひしいでくれん。吠え頬かはく
の蔭より悦ぶと傳へておくりやれ翠殿 しと フシ申し捨てゝぞ引返す。地スハ な左衛門と。地互の廣言雙方か。詰寄
と。末期の一句孫娘。ナウコレ今が別 一大事と左衛門宗貞。劣らぬ正清雙方 り詰寄る。フシ勇者と勇者。
れかと歎けど更にその甲斐も。嵐が告 が忍び裝束脱捨つれば。肌には小具足 々は正體も。なみだながらに勞はれど。
ぐる螺太鼓遠音にひゞき。フシ物喪し。身をかため。勢ひ込んだる フシ軍場の フシ枯るゝ老木と。地諸共に惜しや綠
地加藤が郎等木村和田藏。駆來つて大 出立ち。地やをれ正清確かに聞け。久 音聲。調 大内が本城山口は要害堅固の 吉樂毅が術をなすとも。味方は臥龍が 絶所なれば。地數日の對陣時を待ち計 備へを立て。只一戦に追つ散らさん。きに目もやらず。互に睨み相撲同士。
り知つたる海手より。足利慶覺西國へ 調早く歸つて猿冠者が。首を堅固に用 又も聞ゆる。攻め太鼓。哀れを跡に三
下向と流布せし六字の旗。武器を隱せ 心せよ。シヤ。案外なる非禮の過言。つ羽の征矢。射るが如くに兩人は戦場。
し兵船に。押立て〳〵押渡る。味方は 山口如きの破れ城。正清先陣蒙らば一 指して 三重出でて行く。